第 2 回「気になる子」の発達理解
～できなさの中に輝きをみる～

講師　神戸大学大学院准教授　　赤木　和重氏

はじめに

私は発達心理学が専門です。そこで、その立場から、子どもをどう捉えるか、特に障害のある子や気になる子をどう捉えるかというところから伝えていきます。今日のタイトルの「～できなさの中に輝きをみる～」という視点、気になる子をどう捉えるか、私自身の確信につながる、子ども理解の糸口です。いくつか事例を出しながら、この点についてお話します。子どもをいつもとはちょっと違う角度から見て、子どもの気持ちを捉える機会にしていただけたら嬉しいです。

1　教示行為

私は、子どもを教えるのではなく、子どもが誰かに教える行動（“教示行為”）の発達研究をしています。ところで質問ですが、障害のない子どもの場合、何歳位からほかの子に教えるようになるでしょうか？友達が鞄を違うロッカーに入れた時に、「ちゃう、ちゃう」と正しい場所を教えるという、シンプルなことも含めると、私の研究では、1歳の後半から教えることが明らかになっています。赤ちゃんの前で、私がわざと間違えて四角に丸の型はめをしてみると、1歳前半の子は自分ではめ、1歳後半の子は「あっ、あっ」と言いながら、こっちだよと教えてくれます。2歳過ぎると、「ちゃう」「こっち」などの言葉で教えるようになり、2歳半くらいになると、私がはめると、「じょうず」と褒めてくれます。

特別支援学校の先生方は、重度の障害のある子を見ると教えこまなくてはいけないと考えがちです。しかし、子ども自身が他者に働きかける力、言い換えれば「人間関係の主人公になっていく力」は、障害が重くても持っているのだということを伝えたくて研究しています。

2　特別支援学校　小学部　ドミノ倒しの事例

T君は小学校2年生（発達年齢：1歳半くらい）、自閉症で、きっちりしたいというこだわり（トイレの履物を形に合わせて揃える、人が着ている服でも、第1ボタンまではめるなど）があります。

ドミノ倒しの授業で、マークの上にドミノを置く活動を繰り返していました。3回ほどやったところで、彼はマークからずらして置き始めました。一見すると、マークのとおりに置けない、できない姿です。彼は、自閉症の障害特性である視覚優位の子であり、写真などを用いた視覚支援がはまりやすいといえます。しかし、だからこそというべきか、目につくものが気になってしまい、どんどん自分を追い込んでいってしまいます。

そういう彼がマークの上にドミノを置かずに「ずらした」ことは、目で見たものに引きずられる状態から、少し自由になっていく、自分の制限を越えていく発達した姿だと解釈できます。なぜずらせたのでしょうか。ドミノが楽しかったからでしょう。カタカタという感触を好み、その活動の楽しさが、自分の不自由さを乗り越えていく、そういう姿だと思います。その後、担任は、マークなしのところにドミノを並べるようにしました。こうやって子どもの姿から教育方法を変える、授業を新たに創ることは、

現場で教える人にしかできない発想です。

指導案どおりにいくのがいい授業だと思っている人がいますが、指導案とは、より子どもを深く理解し、授業の方針を創る上で必要なもので、それが絶対的ではないはずです。ＰＤＣＡを絶対的とし、自分で物事を考えなくなったり、子どもの視点から物事を見なくなったりすることは怖いことです。できる、できないではなく、子どもの姿を「すごい」と感じる、輝いている部分を、気になる子の中に見つけていくことは、簡単なことではありません。でも、それが出発点です。

３「気になる子」とは

「明確に障害というわけではないが、何か気になる子」が増えていると思います。例えば、些細なことでキレる子、保育者と繋がらないわけでも、一緒に遊ばないわけでもないけれど、遊び込めずに一人の世界に入っている子、年長になっても、みんなが話す場面で自分の話だけをずっとしてしまい、人の話を聞けない子がいます。そういう子の理解が難しく、保育もうまくいかないことがあると思います。

だからこそ「気になる子」のハウツー本がたくさん出ています。

例えばある本では、しゃべってはいけない場面でもよくしゃべる年中児の事例がありました。先生が「今日はこれからお散歩に…」と言ったことに刺激され、しゃべり出す子がいます。先生が注意をすると、その時は静かになりますが、すぐにまたしゃべり始めます。

この本にはいくつかのルールが書かれていたのですが、その１つに「子どもが勝手に話した回数をボードに書いて注意する」という視覚支援が推奨されていました。小学生になり、「おしゃべりを止めたいのに止められない。何とかしたい。」と悩んでいる子であれば、この方法も悪くはないです。しかし、年中児でこの方法は難しいです。なにより、この対応の背景にある子ども観に、私自身がざわっとしました。本を書かれた方は善意で書いているとは思うのですが、「気になる子」＝「できない子」「問題のある子」「規範を乱す子」「先生の思い通りにならない子」という考えが透けて見えます。こういう子ども理解をしているからこそ、「できないことをできるようにする」「問題行動をなくす」保育にばかりなるのだと思います。でも、本当にこのような保育で、子どもは自分に自信が持てるでしょうか。自己肯定感が身につくでしょうか。

皆さんも、できないこと、どうしようもないことってありますよね？いいことをして褒められて自己肯定感が上がる場合ももちろんあります。でも、できないこと、どうしようもないことも含めて認め合える、笑い合える、許し合える、その中で人が変わっていく、そういうことが自己肯定感に繋がります。できないことをできるようにして褒めて、自己肯定感が上がるというのは、強い人の論理です。大事なことではありますが、そう思っていてもできなくて困っている子がいるんです。そういう子どもを助ける論理にはなりません。

また、「気になる子」をこのように理解していたら、子ども集団はハッピーになるでしょうか。分断が起きると思います。ハウツー本を見ると、「気になる子」の理解が、今の子どもの状態を「できない」と捉えて、それをできるようにさせるということが多いようです。それだけではない、もう少し違う角度で見てみたいというのが私の考えです。

「気になる子」ですから、「気になる」「できない」「どうしようもない」と思われるところがあるのは当然です。だから、それをできるようにすることは大事です。でもそれだけではなく、否定的な行動の中に「素敵なところ」「輝き」を見出し、そこから保育を組み立てていく。そういうことができたら子どももすごく楽だし、保育者も追いつめられなくなります。

４　「ちんこ」を連呼する自閉症の子ども

放課後等デイ（障害児の学童のような場所）での実践を紹介します。Ｔ君（小学校５年生）は自閉症スペクトラムがあり、知的遅れはありません。対人関係が難しく、小１から支援学級に通っています。小 1 でデイに来た当初は、先生や友達に無関心でした。友達に関心が出てからは、自身のルールを人にも押しつけることもありました。周囲への関心が広がった証拠でもあるのですが、その分、トラブルも増えました。

そんなＴ君が小４から「ちんこ」が面白くなり、言いたくなりました。障害のない子でも幼児期に「ちんこ」「うんこ」などを発して、人の反応を楽しむことがありますが、彼の場合、相手の反応を求めているわけでもなく、思春期の興味からでもない、どちらかというと追求、探究、言葉の思いつきがただただ楽しいという感じです。担任はこれをやめさせたいと考えていました。

ある日、担当外の職員に、「Ｔ君、本当に楽しそうに言っているね。」と言われたことで、（もし注意をしなかったらどうなるのだろう？）と思い、彼の言いたい気持ちを抑えるのではなく、別の形で表現できるものがないかと考えました。もともと書くことが大好きなＴ君なので、「言う」のではなく「書く」ことで「言いたい」気持ちを表現してもらい、受け止めるのはどうかと考えました。問題は「自ら書く」という気持ちをどう引き出すかです。ここで大人の正論を言っても意味がありません。彼が必然性を持って書くようにしたいと考えました。

そこで担任は、Ｔ君がちんこネタを言い出した時にそばに行き、「Ｔ君の大事なネタだから忘れないように。」とそのネタを書き留めました。次に「大事なネタだから人に盗られないように小さい声で教えて。」と伝え、調子よく次々に出てきた時に「書ききれないから、Ｔ君書いてくれない？」と、大学ノートを使って、マル秘の下ネタ帳を作りました。

視覚的な支援も大事ですが、個人の興味・関心から始める支援は、もっと大事です。彼が喜ぶツボは目の前の保育者しかわかりません。その子の生活を知っている保育者にしかできないことです。思いついたネタを大きな声で言った時には、「下ネタ帳に書いておいで。」と促し、「どうしても言いたくなったら先生のところに言いにおいで。」「おやつの時には言わないよ。」と声をかけました。結果的に言っていることは最初と一緒です。しかしプロセスが違います。一方的に注意して止めさせることと、共感して伝えることとは意味が違います。

担任は「Ｔ君がすごく楽しそうにしているのを、外から見ているのは不自然だ。」と一緒にネタ作りを始めます。担任の受け止めのおかげで、Ｔ君は我慢ができ、ほかでは言わなくなりました。担任の関わりがあって、Ｔ君が自分で自分を我慢するということになったのだと思います。

５　学んだこと

見た目は「普通」とは違う実践にみえるかもしれません。でも、むしろオーソドックスな子ども理解に基づいた実践です。１つ目の視点は、子どもをよく見ることです。どうやめさせるかを考えている時は、気になるところしか見ておらず、子どもを見ていません。「注意」ではなく「見る」ことで、本当に好きなことがわかります。そのままでいいわけではないので、別の表現をしていきます。２つ目は、その気にさせることです。保育者の専門性はここにあるのではないかと思います。３つ目は、子どもと本気で楽しむことです。真剣に付き合ってくれる先生に、子どもが心を開きます。

問題行動の中に、子どもがやりたいことや楽しいことがあり、私はそこを輝きとして捉えたいです。そういうことを保証する、更に楽しみ方を増やしていく、そういう中で子どもが変わっていく示唆的な事例です。

６　一人でばかり遊ぶ

『「気になる子」と言わない保育』（ひとなる書房）より

Ｇ君（３歳：年少クラス）は自由遊びの時間、ほとんど一人でミニカーを動かして遊びます。一人で遊んでいる時は機嫌がよいので、放っておいていいのか、どんどん自閉的になってしまわないか、と悩み、心配になります。一緒に遊ぼうとしなかったり、やり取りができなかったりするわけではないけれども、他児の遊びに関心が持てないという子です。

よくありそうな対応は、目に見えたものに関心が移りやすいので、こだわりの物を隠すというものです。もう１つは、そもそも友達の遊びに関心がないのかもしれないので、一緒に遊ぶ前に、友達の遊びを見る機会を作るというものです。しかし、そもそも、車で遊ぶことはだめなのでしょうか？止めさせなくてはいけないのでしょうか？こだわりと聞くと、つい私たちは「なくすべきもの」と考えがちです。「目に見えないようにする」という対応は、障害特性に応じてはいます。しかし、Ｇ君にとって、車は好きなものです。彼が「車をやめたいけれどやめられない。」という葛藤があれば「しまっておく」ことは有効ですが、一方的になくすというのは大人の勝手な都合にすぎません。ではどうしたらいいのでしょう。岡村先生たちの保育を紹介します。

Ａ君（３歳児）は車で遊ぶのが大好きで、他の遊びにあまり関心がありません。保育者が仲間に入り、一緒に車を走らせて遊ぶと、楽しそうな様子に、Ｋ君が寄ってきました。Ｋ君が「なにしているの？」と聞きますが、Ａ君は答えません。そこで保育者が答えます。ここで「Ｋ君が聞いているよ。」などと声をかければ、遊びが途切れます。Ａ君に言わせようとしないで、Ａ君の遊びを切らずに保育者が答えたことも大事です。３人で車を走らせて遊びながら、保育者は、ほかで遊んでいる子ども達と繋げたいと考えます。それぞれ違っていいのだけれど、一緒に遊ぶと楽しいよね、という発想です。積木で遊んでいる子のところへ車を走らせ、車で遊んでいる子と、積木で遊んでいる子を繋げる声掛けをするというのが、この事例の一番の肝です。「車をやめさせる」「車だけでいい」ではなく、車と積木の遊びを繋げると、ほかの子が乗ってきます。物事には順序があります。いきなり一緒に遊ぶのではなく、一緒の雰囲気の中にいること（並行遊び）自体が楽しい、そこに意味があります。

７　まとめ

紹介してきた実践はバラバラですが、伝えたいことは１つだけです。できなさの中にできることや、変わっていく姿を見つけていく。「ちんこ」を言いまくるという行動が、やったらいけないことだとはわかっているのだけれどやってしまう、どうしようもないことの中に、「それっていいよね。」を見つけていく。一人で車で遊ぶこと自体は悪いことではなく、すごく楽しいことです。それぞれの「好き」や「楽しい」を繋げていくのが保育者の仕事です。一人ではなく、みんなと一緒にやる中で楽しさが生まれてきます。そこから、子どもは自己コントロールや我慢すること、自分で考える力が育っていきます。「今持っている力がいいんだよ。」と大事にして、認めて、広げて、繋げていくと子どもは、変わっていきます。

実際にはそう簡単にいかないこともわかっています。ただ、否定的に見るのではなく、そこに輝きを見つけていこうとする視点を持つことで、何か変わっていくのではないかな？と思っています。

参考文献：赤木和重・岡村由紀子（編）
『「気になる子」と言わない保育』（ひとなる書房）

第２回 保育者資質向上研修会
平成 29 年８月 26 日
会場：焼津市総合福祉会館ウェルシップ